

土木工学・建築学委員会 IRDR分科会（第25期・第1回）

議事録

1. 日時 令和2年12月28日(月) 09:00-11:10

2. 会場 オンライン会議 (zoom)

3. 議題

- (1) 委員紹介
- (2) 24期 IRDR 分科会活動と申し送り事項、25期分科会設置主旨
- (3) 委員長互選、副委員長、幹事指名
- (4) 委員追加と特任連携会員の推薦について
- (5) 小委員会の設置について
- (6) 25期活動について
 - 1) IRDR 次期計画の進捗状況
 - 2) 関東大震災100年を迎えるに当たって
- (7) 国内外連携活動の報告
 - 1) UNDRR 関連
 - 2) GADRI
 - 3) 第3回世界防災フォーラム
 - 4) 防災学術連携体
 - 5) 防災減災連携研究ハブ
- (8) その他

4. 配布資料

- 01-01 委員名簿
- 01-02a IRDR 分科会報告（20200804の土木工学・建築学委員会提出分）
- 01-02b IRDR 分科会議事要旨（20200805）
- 01-02c 地球人間圏分科会との共同提出提言
- 01-02d 地球人間圏分科会との共同提出提言の記者発表用要旨
- 01-02e IRDR 分科会設置について
- 01-04 特任連携会員の推薦について
- 01-05 小委員会の設置について
- 01-06a IRDR SC24 議事次第
- 01-06b IRDR SC24 議事資料

- 01-06c IRDR 2010-2020 レビュー
- 01-06d IRDR 次期計画資料
- 01-07-01a UNDRR GAR 資料(1)
- 01-07-01b UNDRR GAR 資料(2)
- 01-07-01c UNDRR GAR 資料(3)
- 01-07-04 防災学術連携体の活動
- 01-07-05 防災減災連携研究ハブの活動

5. 出席者 小池俊雄、佐竹健治、今村文彦、大原美保、風間基樹、川崎昭如、齊藤大樹、寶馨、多々納裕一、田村圭子、塚原健一、西嶋一欽、林春男、堀宗朗、宮野道雄（名簿順、敬称略）
6. 陪席者 白田裕一郎、小森大輔、田端憲太郎、根本恵理子、山崎律子（五十音順、敬称略）

7. 議 事

アクション・アイテム

(1) 委員紹介（資料01-02）

(2) 24期IRDR分科会活動と申し送り事項、25期分科会設置主旨（資料01-01, 01-02a,b,c,d）

- ・ 24期 IRDR 分科会の委員であった名古屋大学・鈴木康弘教授（連携会員）に、本分科会の委員に加わっていただくことを承認した。現在手続き中の東北大学・小森大輔准教授（連携会員）を含めて、本分科会は全 17 名の委員となる見込み。
 - 鈴木康弘教授の承認についての幹事会での事務手続きを小池委員にお願いする。

(3) 委員長互選、副委員長、幹事指名

- ・ 合議の結果、林委員が本分科会の委員長として選出された。
- ・ 林委員長の指名により、以下の副委員長、幹事が選出された。
 - 副委員長：寶委員
 - 幹事：田村委員、川崎委員

(4) 委員追加と特任連携会員の推薦について（資料01-04）

- ・ 東北大学・小野裕一教授、名古屋大学・西川智氏を特任連携会員として推薦することを承認した。特任連携会員は通常 1 名、最大 2 名なので、1 名しかお認めいただけない場合、小野裕一教授を優先的に推薦する。

(5) 小委員会の設置について（資料01-05）

- ・ これまでと同様に 25 期も小委員会を設置し、分科会と同時に開催する。IRDR 分科会委員に加えて、下記の方々を小委員会委員に追加することを承認した。

天野 雄介	独立行政法人国際協力機構 (JICA) 理事
池田 鉄哉	国立研究開発法人土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター 特別研究監
小浪 尊宏	国土交通省総合政策局海外プロジェクト推進課企画専門官
田端憲太郎	国立研究開発法人防災科学技術研究所主任研究員
中尾 晃史	内閣府参事官 (普及啓発・連携担当)
西口 尚宏	一般社団法人日本防災プラットフォーム代表理事
廣木 謙三	政策研究大学院大学教授
深澤 良信	西日本鉄道住宅事業本部海外展開室長
山崎 律子	国立研究開発法人防災科学技術研究所企画部次長
ラジブショウ	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授

- ・ 小委員会の場合、新たな委嘱手続きが必要でそれに 1 ヶ月を要するので、小委員会の開催は来年 3 月以降となる。その間、小委員会は開催できずに、分科会のみで開催となる。
- ・ 特任連携会員が 1 名しか認められない場合、名古屋大学・西川智氏に小委員会委員をお願いする。

(6) 25期活動について

1) IRDR 次期計画の進捗状況 (資料 01-06a,b,c)

- ・ IRDR の体制図 <<http://www.irdrinternational.org/who-we-are/structure/>>
- ・ 防災に関する科学を推進する国際研究プログラムであり、今年で 10 年目を迎える。ISC (国際学術会議) と UNISDR (現在の UNDRR : 国連防災機関) が発議の主体。CAST, CAS, RADI はプログラムのスポンサー機関 (全て中国系)。国際事務局 (IPO) は北京にある。
 - このような国際プログラムで、ジュネーブを離れて海外に事務局が置かれるのは稀。
- ・ Qunli Han 氏が事務局長となり、ガバナンスが効き始めた。
- ・ Scientific Committee (SC) は 14 名の専門家から構成される。日本からは長らく竹内邦良教授が SC メンバーを務められ、現在は林委員長が SC メンバーである。
- ・ IRDR National Committees (NCs) は 13 カ国あり、日本が一番初めに設立された。学術会議では、本分科会が対応している。
- ・ International Centres of Excellence (ICoEs) は 17 センターである。それぞれが Issue specific のセンターであり、第一期の SC メンバーが設立したものが多い。
- ・ IRDR Working Groups (WGs) として、Assessment of Integrated Research on Disaster Risk (AIRDR), Disaster Loss Data (DATA), Forensic Investigations of Disasters (FORIN), Risk Interpretation and Action (RIA) という 4 つの研究プログラムがある。日本の OSS も WGs の一つとして位置づけられている。SC 開催の際、林委員長が活動報告をしている。

- ・ その他、Young Scientist Program もある。
- ・ IRDR の中間レビューでは評価が低かったが、次期でも DRR プログラムは必要という機運が高まっており、現在、次期 10 年計画について議論している。
- ・ 資料 01-06c の 4. Gaps and Challenges → 4.2. "Research Gaps: new uncertainty and new agenda" の中に記載されている "systemic and cascading hazards and disaster risks" がキーワード。
 - 強い相互依存の社会システムの中では、あるところで障害が起こると、全体に大きな障害が起こる。ある地点で発生した一現象が世界中に波及していくので、そこに対して手を打つ必要がある。そのような視点で、次期十年計画を検討している。
- ・ 本来であれば、今年 10 月に計画策定が終わっているはずであったが、コロナ禍で 1 年遅れている。来年の GAR までに収束して、次期に向かうというスケジュール。
- ・ 日本の IRDR NC (IRDR 分科会) で議論していることを国際的議論にのせるには？
 - 現在 IRDR で行われている議論と日本の議論には、本質的な乖離があるという印象。かなり抜本的な変化が必要。
 - SC メンバーは変わらないが、チェアがオーストリアの John Handme 氏から、国連大学サステイナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) の Riyanti Djalante 氏に変わった。
 - STAG チェア (ラジブショウ教授) および IRDR SC チェア (Riyanti Djalante 氏) が日本にいたので、Riyanti Djalante 氏にも小委員会に陪席していただき、彼らを通してもっと国際的にアピールをする必要がある。その意味で本分科会と小委員会の同時開催は有効である。
- ・ 今、何かアクションを起こすことで次期計画に影響を与えることは可能か？
 - 林委員長とラジブショウ教授は 10 年計画のレビュー・コミッティーであり、ドラフティング・コミッティーは欧州系が多い (→ 林委員長: 名簿を探して、共有する)。いろいろなチャンネルを通して、インプットすることも可能では。
- ・ キーワードとして、Planetary Health という用語も頻繁に出てくる。全部が関連しており、Health にフォーカスしている。
 - 東北大から災害医療分野の専門家の推薦も可能。
- ・ 今度の SC はオンライン開催なので、(本分科会委員なども) オブザーバーとして参加することも可能。

2) 関東大震災 100 年を迎えるに当たって

- ・ 2023 年 9 月 1 日が関東大震災 100 周年であり、25 期の任期は 2023 年 9 月 30 日まで。多様な企画が開催されるであろうから、学術会議としても主導したい。
- ・ 1906 年のサンフランシスコ地震を振り返るイベントが 2006 年にサンフランシスコで開催された。学術的なものや危機管理系のものなど、街をあげて多分野で 100 年を振り返るイベントがあった。
- ・ これまでに日本学術会議では 2013 年より防災・減災に関する国際委員会を組織し、2015

年には第3回国連防災世界会議に先立ち「防災・減災に関する国際研究のための東京会議」を開催し、2017年には「災害レジリエンス構築のための科学・技術国際フォーラム」を開催した。25期では関東大震災100周年を目標に据え、イベントを開催したり、刊行物を作成することなどを考えていきたい。

- 東大地震研は、関東大震災を契機に1925年に設立された。2025年の地震研設立100周年に向けて準備を進めている。
- ・ 小委員会の皆様を含めて、タスクチームを作って議論と準備を進めていく必要がある。

(7) 国内外連携活動の報告

1) UNDRR 関連 (資料 01-07-01a,b,c)

- ・ GAR21 に向けての素案が紹介された。
- ・ GAR22 に向けてもコンセプトノートが紹介された。

2) GADRI (多々納委員資料)

3) 第3回世界防災フォーラムおよびその他

- ・ 第3回世界フォーラムは、コロナ禍の影響を受けて、2022年11月開催(延期)予定。
- ・ 東日本大震災10年: 仙台防災未来フォーラム2021年3月6-7日に開催される。ハイブリッド開催を検討中。
 - <https://sendai-resilience.jp/mirai-forum2021/>
- ・ 防災ISO(世界標準化)の正式にWorking Groupが立ち上がったので、本格的に検討を開始する。
 - <https://www.iso.org/committee/656967.html>
- ・ 東北大学(災害科学国際研究所)では文科省附置研(第4期): 共同利用・共同研究拠点の新規での申請を予定している。関係機関に相談、また、学会・団体等に要請書を依頼中。
 - https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/046/index.htm

4) 防災学術連携体 (資料 01-07-04)

5) 防災減災連携研究ハブ (資料 01-07-05)

- ・ 科研費 学術変革領域研究(A)採択の代表者は比較的若い方が多かったようである。

(8) その他

- ・ 議事録は幹事が作成して会議後に委員の間で回覧する。最終的に委員長一任で確定の後、公開手続きをとる。

- 連絡の都合上、メールアドレスを分科会のメンバー間で共有することにする。
- メール審議を実施することがある。

- 『SIP 国家レジリエンス』に関して、
 - 3年で打ち切りの可能性が無くなった。このため、R3年度に『防災グランドチャレンジ』と称する公募を行う予定。
 - CSTI（総合科学技術・イノベーション会議）にて、防災研究の全体俯瞰を行った。防災事業と防災研究を効率的に進める体制を整備すべきという意見が出ており、意見聴収が行われる予定。
 - 感染症対策下で防災研究が成果を出しており、CSTI から高く評価されている。臼田博士を中心とする研究者の努力のお陰であり、改めて感謝したい。